

「ポストコロナ」であらためて考える「私」と「街」

新型コロナウイルスによる急速な社会変化を捉え、新たな都市や建築を創造します

21世紀は「都市」の世紀になると言われてきました。
しかし、新型コロナウイルスの猛威は、
未だ20世紀の延長線上にあった都市モデルを見直す契機となったのではないのでしょうか。

これまで国内では、超少子高齢化社会の到来や、ツールや空間の高機能化、コンパクトシティ化、
SDGs、グローバル化への対応が進められてきました。

世界経済のあり方やそれを反映した都市モデルにも綻びが見えていた最中、
新型コロナウイルスはその綻びを確定付けた。今新たな都市モデルの構築が必然となっています。

三菱地所設計はこれまで、「歓びを共有し、健康となる建築」として「歓共健築」®を提唱してきました。
これは、新型コロナウイルスにより顕在化した都市が有する課題への対応にも通じる考え方ではないでしょうか。

加速されたライフスタイルの変化の中で、新たな都市・建築を創造するため、
この考え方をさらに成長させていきます。

「群」と「個」が共存できる都市空間へ

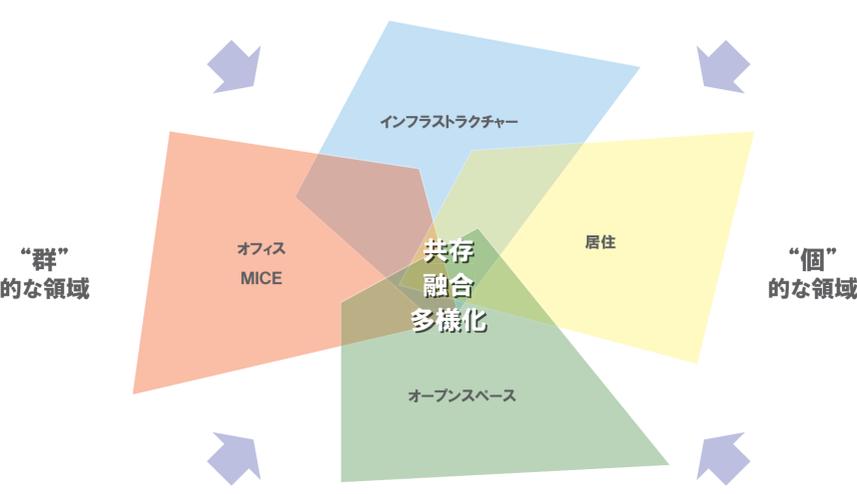
新型コロナウイルスにより、人が密集した「群」への危険性が認知されました。
同時に、デジタル化の進展を通じて、過剰な「群」の解消が可能なこと、ビジネスや社会活動が「群」でなくてもある程度可能であることが分かってきました。

一方、WEB上では伝わらないコミュニケーションの重要性、きめ細やかな心理面への配慮など、「個」での行動に偏り過ぎることへの社会的課題も確認されつつあるのではないのでしょうか。

今後は、これまで固定化された「群」と「個」が共存する都市空間が求められると考えます。

「個」では手に入れられないチャンスや刺激を「群」の中”に求め、
「群」では得られない多様なライフスタイルやサービス、健全性を「個」の中で確保する。

「群」と「個」を人々が使いこなせるような社会が訪れる、その社会を支え、
溶け込むような都市・建築を創造していきたいと考えます。



「合理性」+「感性」の都市へ

これまでもIT技術の進歩と同時に、ライフスタイルの変化が徐々に進行してきましたが、多くの人びとが新型コロナウイルスにより、半ば強制的に新たなライフスタイルへの順応を求められたのではないのでしょうか。

こうした変化の中でも人間の生理的な活動や感性・欲望は不変的なものです。

人びとの行動がより自由になり、どこでも仕事ができるようになると、経済活動優先であった都市の役割も変化し、人間の感性や身体的活動が重要視されるものと考えます。

三菱地所設計は、利便性や効率性に基づいた価値観のみでなく、心地よさ、楽しさといった「個人の感性」に基づく価値観を重視し、セレンディビティ（偶然の出会い）のある、そんな都市づくりを目指します。



ストック活用による都市のリ・デザイン

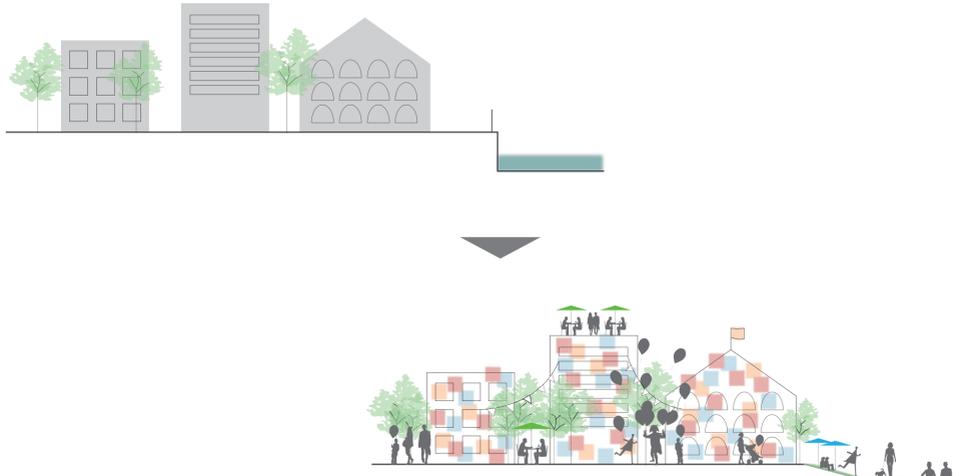
新型コロナウイルスは、これまでの利便性・効率性に特化した都市のあり方を見直す機会をもたらしました。

今、社会環境やテクノロジーにより働き方や生活が大きく変化中、その変化にも柔軟に対応できる都市が求められています。

まちには文化財などに指定された建物に限らず、多くの良質な既存ストックが存在しています。これらに加え、緑・水辺などの蓄積された都市資産も活かしながら進めるイノベーションが重要と考えます。

既存ストックをも活用しながら、付加価値を備えた建物へと再生していくことも、今日の社会的ニーズに応えるひとつの方法です。

これまで培ってきた既存ストック「再生」の豊富な経験を踏まえ、都市をリ・デザインしていきたいと考えています。



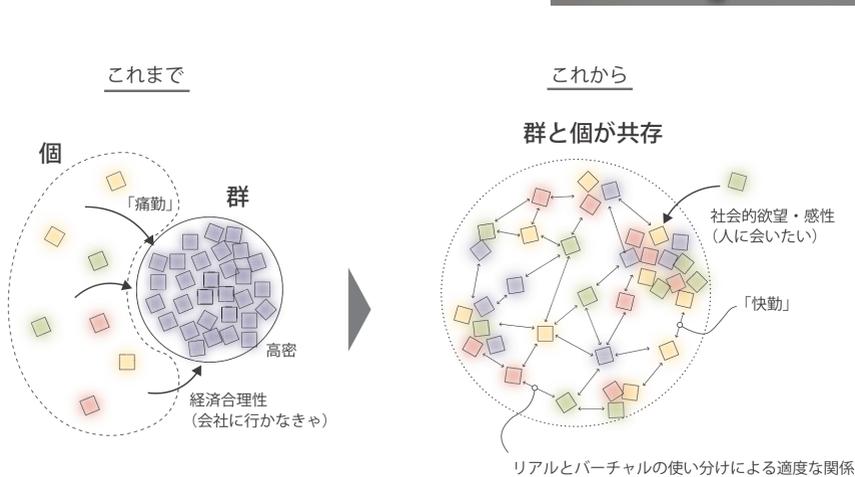
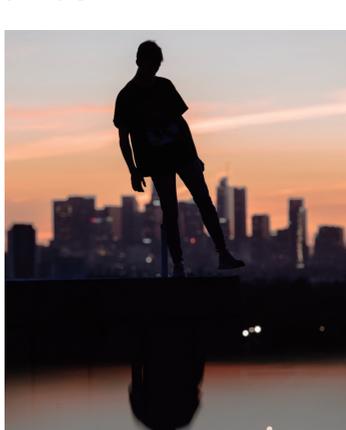
ポストコロナの「見えない敵」に備える都市空間

歴史的には、人びとは幾度もパンデミックを乗り越えてきました。

その度に、都市は復活・成長し、社会の再生を支えてきました。今回の新型コロナウイルスからも多くのことを学び、都市・建築に取り入れて成長させ、都市のレジリエンスを高めることが重要と考えます。

どこでも働くことができる環境づくり、新たな交通による移動手段の分散化、屋外空間の多様な活用など、都市的な活動における場や手段の選択肢を増やすことも、都市のレジリエンスを高める方法のひとつと考えられます。

さらに今後は、次のパンデミックに加え、異常気象や震災といった自然災害の複合など、次なる想定外の出来事に対するレジリエンスを備えた都市・建築の創造が必要であると考えています。



※歓共健築®は三菱地所設計の登録商標です
<https://www.mj-sekkei.com/kkkc/>